

男女共習のダンスにおける 主体的問題解決能力の育成

中村なおみ¹・川口千代²・鈴木和弘³
小磯 透¹・小山 浩¹・西嶋尚彦⁴

¹筑波大学付属中学校, ²千葉大学, ³国際武道大学, ⁴筑波大学

1. はじめに

本研究では、今回改訂された指導要領で、キーワードとなっている「生きる力」の育成を、以下の図のような概念モデルとして捉えた。(図1)

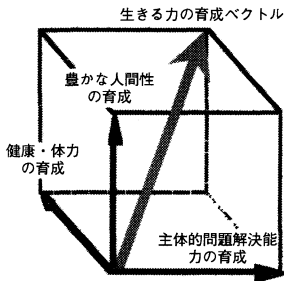


図1. 「生きる力の育成」の構成要素

また、ダンス学習では「課題解決学習」という「自発的な創作活動」を支える授業の実践研究が継続されてきた。特に、男女共習授業の実践研究の中で、発達段階や性差を越えて初めての創作的なダンスの丁寧な指導の手だてが明らかになってきた。これまでの授業実践を通して単元の前後で、生徒(動きや動きの見つけ方・仲間との関わり等)が大きく変容することは、実践者の眼にはあきらかであるにもかかわらず、ダンスにおける「課題学習」の成果として客観的なデータで教育的効果を示しにくい面があった。

そこで、本研究では「生きる力」という新しい教育観に着目し、これまで実践研究の継続により作られてきたダンス単元の教育的効果を確認しようとするものである。

そこで、本研究では「生きる力」という新しい教育観に着目し、これまで実践研究の継続により作られてきたダンス単元の教育的効果を確認しようとするものである。

2. 方法

授業内容：表1 (全14時間で構成)

表1. ダンス単元における概要

時	課題	学習の意図 (*課題選択の柱)
1	オリエンテーション	体の動きと表現・授業の見通しを持つ
2	しんぶんし	ものの動きをよく観察する *ダイナミックなひと流れ
3	走る一止まる	学習の流れをつかむ *空間の水平移動
4	集まる一飛び散る	仲間を感じながら動く *群の変化
5	ウォームアップを作る	仲間を感じながら動く *リズムの変化
6	見立ての世界①	発想の転換・柔軟な視点作品らしいまとまりを創る
7	見立ての世界② (ミニ発表会)	作品発表の練習 *物とのコラボレート
8	ディズニーランドへ行こう	ひらめきをすぐ動きにする *デッサン
9	課題の総復習	学習した課題を復習し、連続した長いひと流れに挑戦する。作品づくりへの橋渡し *運動・変化・連続
10	作品づくり①②③	これまでの学習の総まとめ *作品
13	発表会	発表と鑑賞 *演・鑑賞
14	学習のまとめ	個人グループのまとめ

対象：T大学附属中学校・1年5クラス(男女共習)
男女205名 (男子102名女子103名)

時期：1998年1月～3月中旬

方法：単元実践前後に2回質問紙調査を行い、平均値の比較にはt検定を用いた。

質問紙の構成：ダンス領域に直接関与するイメージやその効果、主体的問題解決行動の成立要因に基づく内発的意欲、達成満足、主体的行動、自己認識の5領域から構成し、文献と保健体育の専門家の意見の集約により下位領域を設け、各領域について2～3の質問項目で構成した。5件法で測定した。

3. 結果と考察

単元の前一後2回の調査結果から、授業実践を通してほとんどの項目で統計的に有意な差が認められた。

自覚的には、学習を通して生徒が大きく変化することは確実に感じていた。従って、学習内容に関する質問項目については、統計的にも変容が見られることが期待された。しかし、「自己表現」というダンスの特性から考えて、人間形成や情動的な項目に対しては、精神的発達が大きく影響するため、数年間という長期的スパンで起こる変化ではないかと考えていた。今回の調査では、この項目についても、たった10数時間の授業で統計的に有意な差が認められた。

以下その主な結果を下記に示す。

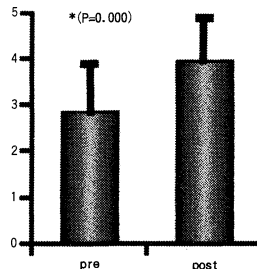


図2. 動きのアイデアが次々と広がる

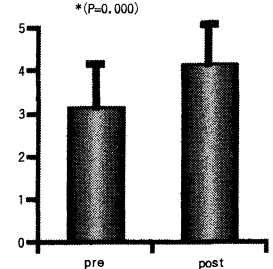


図3. もの見方が広がる

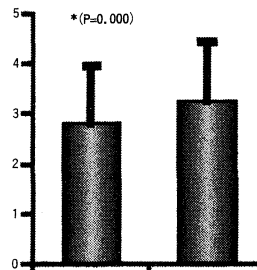


図4. 体力には自信がある

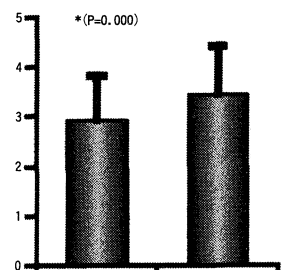


図5. その時間の学習をまとめて整理している

以上の結果から、新しい「生きる力」という教育理念においても、ダンスの「課題解決学習」という学習モデルでの授業は、生徒の主体的問題解決能力を育成することができると推察される。